

氏名	フイロズ マハムド		
学位の種類	博士（美術）		
学位記番号	博美第325号		
学位授与年月日	平成23年3月25日		
学位論文等題目	〈作品〉"sucker'wfp21"、Layapa Paintings Series 〈論文〉変遷の中で：多国的、多文化的時代での移住者の美術家における逆説的烈火の光景－自作品におけるデジ概念とサブカルチャー的表現の考察		
論文等審査委員			
（主査）	東京芸術大学	教授（美術学部）	坂口寛敏
（論文第1副査）	〃	〃（〃）	木幡和枝
（作品第1副査）	〃	准教授（〃）	中村政人
（副査）	〃	教授（〃）	保科豊巳
（〃）	森美術館	アソシエイト・キュレーター	近藤健一

（論文内容の要旨）

序

本論文は、生まれ育ったあるいは法的居住が認知されている地域以外の国や文化で、一時的あるいは永続的に生活する、移住者としての芸術家に焦点を当てている。彼ら／彼女らは、母国ではない地域や文化のなかで自身の生活に対し、社会的、実践的、政治的にも積極的に取り組んでいる。

ここでいうインフェルノ（inferno）とは、逆説的かつ矛盾のある現代美術の現状において、烈火のごとく移住者の芸術家たちが「急増している」さまを表している。一方で「デシ（Desi, Deshi）」とは、元々はサンスクリット語で「国、あるいは土地」を意味する「deśa」に由来する語であり、インドやパキスタン、バングラディッシュ生まれの人や事物、あるいは広く行きわたっている出身者たちのことを指す。

パートA：「移住者」の美術について考察－多様な実践と世界観

西洋美術の歴史を顧みれば「移住者（Expatriate）」という語はすでに19世紀に見られ、20世紀においても二つの大戦を経るなかで多くの芸術家がヨーロッパからアメリカへと移住している。一方、冷戦構造崩壊後のグローバル化のなかで、ここ数十年の間「移住者」の芸術への関心が高まっている。彼ら／彼女らの作品は「他者性」という観点、あるいは社会政治的な文脈に根ざすという点から理解され、賞賛されている。なかでも「大地の魔術師たち」展（1989年）や1993年のニューヨークでのホイットニー・バイアヌアなどはその先駆的な展覧会とみられるが、彼ら／彼女らの作品は、西洋の芸術的伝統に「脱中心性」をもたらすきっかけを促進するものであったと言える。実際、今日に至るまでアジア、アフリカ、南米から多くの人々がヨーロッパ、アメリカに移入し、世界的に活躍するための基盤を築いている。とりわけニューヨークは「移住者」にとって中心都市であり続けている。また、ヨーロッパパリ、ロンドン、ベルリン、フランクフルト、アムステルダム、ローマ、ミラノの都市は、世界中から移民や文化的難民を継続的に受け入れてきた。まさしく単一のイデオロギーや信仰に依るのではない、柔軟性のある社会がつくり出され、多様な文化的背景を維持しながら民主的な関係を保っている。ザリーナ・ピーミ、アイザック・ジュリアン、キース・パイパー、インカ・ショニハ、シャジア・シカンダー、シリ

ン・ネシャット、ハサン・エラヒ、クリス・オフィリなど「移住者」の美術家たちは、こうした社会状況に活動の場を広げている。日本でもまた、ここ15年から20年の間に、アジアあるいは他の国からさまざまな「移住者」の美術家—ナム・ジュン・パイク（韓国）、蔡國強（中国）、ナウィン・ラワンチャイケン（タイ）、マーロン・ニコラス・グリフィス（トリニダード・トバゴ）など—が活動している。「移住者」の美術家は、絶えず異国へと移動し、本質的に国家の枠組みを越えた存在と考えられる。彼ら／彼女らは、今日において国民国家の機能の外にあるもの、同化されないものとしてしばしば理解されている。

#### パートB：自作品におけるデシ概念とサブカルチャー的表現の考察

私自身もまた、バングラデッシュ出身として、ここ10年の間、国外に移住しながら住んでいる。そのなかで作品もまた、内面の感情や生来的に備えているデシ的な文化を基盤としながら、自然と移住的な視野へと変容していき、同時に国際的なアートシーンを経験する度に徐々に変わっていった。近年は、幾つかのメディアを使った大きな作品プロジェクトを実施している。《HalcyonTarp》や《Sucker' wfp21》は、その二つの例である。一方で、ラパ・ペインティングや幾つかの彫刻作品は、歴史的、神話的な背景を基本としている。なかでも日本の木版（浮世絵）やなまぜ絵の技術に影響を受け、それらの特徴を活かしている。同時に、2007-2008年以降、ニンキ・プロジェクトに取り組んでいる。ニンキは日本語でポピュラーという意味であるが、この作品では著名人（マイケル・ジャクソン、マイク・タイソン、ディエゴ・マラドーナ、朝青龍など）の写真にドローイングを施している。ここでは、彼らが興奮し夢になっている瞬間に焦点を絞り、彼らが激しいジェスチャーしている場面に補完する線を描いている。それらは、彼らの偶像的な顔つきから、私自身にリアリティの感情をかき立てる想像的な補助線である。

#### 結 び

文化のグローバリゼーションに伴い、世界のあらゆる地域が互いに影響し合う中で、文化、美術、生活、経済やその他もろもろの事物において交流、交換が行われている。こうした状況において、美術は何をなしえるのか。「移住者」の美術家たちの作品は、欧米中心的な思考から逸脱するための「叫び」にほかならないように思う。私もまたその歩みをとめずに、今後の制作活動に邁進していきたいと考える。

（博士論文審査結果の要旨）

バングラデッシュ出身のマハムドの論文「変遷の中で：多国的、多文化的時代での移住者の芸術家における逆説的烈火の光景——自作におけるデシ概念とサブカルチャー的表現の考察——」は日英二カ国語で記述されたものである。申請者自身、南西アジアのバングラデッシュに生まれ育ち、現在、日本において現代美術の研鑽、制作、理論研究に携わる立場から執筆された本論文は、近代における世界の再編成の中でとくにロシア革命、2回にわたる世界大戦をへて、20世紀前半からとくに欧米間において定常化した「移住者」アーティストの活躍をふまえ、とくに、近年の極東およびアジア全域、アフリカ、東欧、南米のアーティストたちが欧米諸文化圏において活躍している現状に光を当て、その表現におけるアイデンティティと表現思想・動機・技法における混交、融合、共進化を論じている。その背景には、第二次世界大戦後の第三世界（アジア、アフリカ、中東、ラテンアメリカ）における民族解放＞独立、中東戦争の激化と継続、さらには1960年代以降のヴェトナム戦争、80年代後半からの東欧・中欧、ロシアにおける政治的・民族的再生、そして世界規模のグローバル化と「多民族大移動」が挙げられる。

マハムドはとくに21世紀初頭の現在時点でその芸術的現れを個々の作家を取り上げて論じ、論文後半では自作をテーマとしてそこにおける民族的、宗教的、伝統的なアイデンティティと国際化の関係を論

じ、共進化の具体的な表象を提示した。さかのぼれば、民族大移動という事実を世界史的観点から論じる場合に頻出する「デュアスポラ」という概念がある。ユダヤ民族の世界規模の離散と多数の文化圏における定住から派生した歴史概念である。マフムドの本論文はこのような歴史の強制から出生地や自己の文化圏から他へ移住したいいわゆる亡命者的なアーティストではなく、それらを含みながらも、より多くは、最新のグローバル化のなかでみずから移住を選択したアーティストたちを対象にした論考である。

20世紀末期から21世紀にかけてポンピドー・センターを皮切りに一世を風靡した『大地の魔術師たち』（キュレーターはユベール＝マルタン）をはじめとして、ドイツにおけるドキュメンタ展、イタリアのヴェニス・ビエンナーレなど、日本を含む各地の国際展において、従前の欧米中心の視点にかわり、非欧米圏出身のアーティストによる作品や表現が積極的に取り上げられてきたことは今更述べるまでもない。

本論文は、そうした現象を外側からではなく、出自を非欧米圏にもつ現役の若いアーティスト自身が、表現者の側から論じたもので、その希少価値は高い。著者はまず、このグローバルな百花撩乱の状況を「烈火（インフェルノ）」と名付け、一方、そこにおける多文化的、審美的な進化に有効に作用する要素として、みずからの出身文化圏における概念「デシ」（元々、サンスクリット語で国、あるいは土地を意味する）をキーワードに、きわめて今日的な芸術家の世界規模の共進化の精神的・審美的メカニズムを分析している。

後段の自作の解析においてはより具体的に、そうした「デシ」の立場から、ほぼ10年間に渡る国外における研鑽と制作・発表においてみずからが異文化環境と多文化環境において、いかに自他を融合、止揚して、現代美術にあらたな境地を切り開こうとしてきたかを、実作を例に論じている。そして、その過程を「異境の鏡」と名付けている。そこにはまた、欧米中心の観点から言えば「サブカルチャー」と称されるものを巡る価値観の相克と止揚を見つめる立場が作例を通じて展開されている。

現在進行形のこの現象を具体的に取り上げた本論文は、書かれるべきものとして待たれていたものが当事者の立場から提出されたという射幸的な価値も大きく、その広い視点と表現者ならではの具体的な分析内容をとくに評価し、博士学位に相応しいものであると判断して合格とする。

#### （作品審査結果の要旨）

戦闘機プロジェクト作品〈Sucker'wfp21〉は、全長約8メートルの金属の構造体にFRPで成形し表面にバングラディッシュで食べられている緑、黒、黄、オレンジ、茶色の豆約12万粒を使い制作されている。構造体は、設計図を元に一部発注制作し、12万粒の豆は、ワークショップを開催し、一般市民のボランティアスタッフと何日にも及ぶ協働制作により完成している。この作品の原型は、Super HonetF/18型戦闘機である。バングラディッシュの解放戦争の記念碑であり、軍国主義の象徴として設定している。また、タイトルであるSucker'wfp21とはユネスコの世界フードプログラム（world Food Program）の略であり、世界の食糧計画の危機を暗喩している。一粒一粒が人間一人でありその意志が戦闘機を作ることにも食料危機を生み出していることも人間であり、また平和を願う事もその一人の人間力に委ねられているという両義的批評性の強いメッセージが読み取れる。戦闘機という攻撃的イメージとは対比をなすように、とても優しい印象を受けることは、簡略化した造形性と、着色されていない自然の豆の色彩とその質感によるところが大きい。作品内部や、裏面はまだやりきれていないところも見えるが、今後展示ごとに修正を加える予定と聞く。またこの作品は、あいちトリエンナーレ2010に招待出品されており、国際展においてバングラディッシュを代表するアーティストとして評価を受けるフィロズの初期代表作として高く評価することができる。

〈Layapa Paintings Series〉は、バングラディッシュで粘土づくりの小屋に漆喰を塗るように色を塗る方法のラヤパ（Layapa）技法で描かれた絵画シリーズである。地方の人々が「小屋に泥を塗りつける

ことによって夢を小屋に託していることを想像しながらこの絵を描いている。」と言っている。その技法や制作姿勢は、母国を離れ絶えず生活してきたことによる自らのアイデンティティの喪失や変容に危機感を感じることに由来し、そのため「デジ (Deji) 概念」= 国土、移住のイメージをテーマとすることによって絵画表現の動機を獲得することに成功している。バングラディッシュの歴史や神話、民話、日々の生活に基づき構成される画面は、その物語を読み取れるコードを共有出来ないため、デジ概念を体験するには我々には難解である。しかし日本の浮世絵や鯉絵と比較しグローバルにその地域性、土着性を歴史的な視点から広く捉える表現は、〈Sucker' wfp21〉 戦闘機プロジェクトにも共通の強い批評性が根底にあり、フィロズのアーティストとしての力量を感じる。今後、アートワールドでのさらなる活躍を期待する。

本作品及び、国内外の展覧会等におけるフィロズの制作活動は、本学博士学位に相応しいものである。

#### (総合審査結果の要旨)

フィロズ マハムドはバングラディッシュのダーカ大学で古典絵画を学んだ後、オランダのライクスアカデミーのレジデンスプログラムを経て、給費留学生として来日した。祖国を離れて10年、移住者の美術家として盛んに国際展に出品しながら研鑽と制作・発表を行ってきた。

マハムドの申請論文はアジア、アフリカ、東欧、南米からの移住者であるアーティストたちが欧米文化圏において活躍している現状を照射し、その表現の中に現れるアイデンティティと思想や技法等の共進化を論じている。論文前半では、とくに21世紀初頭の現時点でのアートシーンをふまえ、最新のグローバル化のなかでみずから移住を選択したアーティストたちを対象にした論考を展開し、後半では出自をアジアのイスラム社会にもつ若いアーティスト自身が、自作の分析においてより具体的に民族的、宗教的、伝統的なアイデンティティと国際化の関係を論じ、みずからがおかれている異文化環境と多文化環境のなかで、いかに自他を融合、止揚して、現代美術にあらたな境地を切り開こうとしてきたかを、実作を例に論じている。

大学美術館展示作品「Sucker' wfp21」は全長8メートルの樹脂製ジェット戦闘機の表面を祖国より取り寄せた食料用穀物で被い、軍備増税による人民の生活権の搾取を大胆に表現した。同時に背後の壁面には「ラヤパペインティング (バングラディッシュで粘土づくりの家に色漆喰を塗る方法)」技法による歴史的題材の絵画シリーズが展示され、出自とそのきびしい現実を関係づける優れたインスタレーションとなっていた。

以上のようにフィロズ マハムドの論文と作品は、博士学位に相応しいものであると判断して合格とした。